

## 対象別評価懸念の抑制要因に関する検討<sup>1)</sup>

東北大学大学院医学系研究科 白倉 瞳<sup>2)</sup>

筑波大学人間系 濱口 佳和

Controlling factors on the fear of negative evaluations from others

Hitomi Usukura (*Department of Preventive Psychiatry, Tohoku University, Sendai 980-8574, Japan*)

Yoshikazu Hamaguchi (*Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8577, Japan*)

Fear of negative evaluations from others is known to consist of fears of being negatively evaluated by friends, by parents, and by teachers. This study investigates the roles of parental attitudes and social experiences in controlling such fears. Fifth- through ninth-grade students ( $N=350$ ) participated in a questionnaire survey. Multiple-group structural equation modeling of the responses was conducted to investigate gender differences within a model of the relationships between this fear and its controlling factors. The results indicate that the model is applicable for both genders. They also reveal that autonomy-granting parenting is negatively correlated with fear of negative evaluations by parents. Accordingly, such parenting may be an effective controlling factor against fears of negative evaluations from parents. On the other hand, the results also indicate that there were no significant relationships between experiences of being accepted by parents, peers or teachers and fears of being negatively evaluated by others. Thus, this study failed to illuminate any social experiences that can control the fears of being negatively evaluated by others.

**Key words:** fear of negative evaluations from others, controlling factors, parental attitudes, social experiences

「他者からの否定的な評価に対する心配、および否定的に評価されるのではないかとという予測に対する不安の程度」は評価懸念 (fear of negative evaluation) と呼ばれている (Watson & Friend, 1969, p.449)。児童期後期から青年期前期には、自己意識の確立や認知能力の発達を背景に否定的な評価に対する不安が高まると言われており (Westenberg, Drewes, Goedhart, Siebelink, &

Treffers, 2004)、評価懸念の増加は正常な発達の一部であると考えられている (Ollendick, King, & Frary, 1989)。しかし、このような懸念が極端に強まった場合、対人不安傾向が高まるほか、社交不安障害 (social anxiety disorder) に陥る危険性も孕んでいる。なお、社交不安障害の発症年齢は13歳と報告されているが (Kessler et al., 2005; Schneier, Johnson, Hornig, Liebowitz, & Weissman, 1992)、診断以前から人前での過度な緊張や不安が学業上・対人関係上の困難をもたらすことが知られている (笹川他, 2009)。したがって、児童期後期から思春期を対象に、評価懸念の病理化を未然に防ぐ手立てを解明する必要があると言えるだろう。

ところで、評価懸念に関する先行研究では、評価

1) 本研究は第1著者が平成27年度に筑波大学大学院人間総合科学研究科に提出した博士論文の一部である。また、本研究は第48回日本カウンセリング学会で発表された。

2) 所属：東北大学大学院医学系研究科予防精神医学寄附講座

懸念が生じる相手として「誰か」や「他の人」など一般的な他者を想定させており、児童・生徒を対象とした研究では「みんな」など友人のみを想定させている場合が多い。そこで、白倉・濱口(2015)は、小学校高学年から中学生を対象に、友人、親、教師の三者を想定した対象別評価懸念という概念を新たに導入し、不適応問題との関連を検討した。その結果、対象別評価懸念ごとに異なる適応指標との関連が示され、対象別評価懸念は従来の評価懸念よりも詳細に不適応問題との関連を捉えることができる可能性が示唆された(白倉・濱口, 2015)。

以上を踏まえると、評価懸念ではなく対象別評価懸念を取りあげて、児童期後期から思春期の子どもを対象に病理化を防ぐ手立てを検討することが有効であると思われる。それに際して、対象別評価懸念の形成に寄与する要因を明らかにすることは、予防的介入の観点から知見の蓄積が求められる重要な研究領域であると言える。しかし、形成要因に関する先行研究は対人不安や社交不安障害に関するものが多く、評価懸念に関する知見は少ない。また、先行研究では不安傾向を高めるような促進要因に関する検討が多いが、これらを低減する効果を持つ抑制要因を探る視点も必要であると思われる。なお、Appleton(2008)は、子どもの不安障害を理解するための発達の観点を整理し、子どもの不安障害は単一の原因によって生じるのではなく、発達の過程で経験される様々な要因によって生じること、学校などの社会的文脈も考慮する必要があること、発症に関して両親や仲間が重要な役割を果たしていることなどを指摘している。つまり、児童期後期から思春期にかけての発達の特徴や社会的文脈を考慮した複数の要因を包括的に取りあげ、これらの要因が対象別評価懸念に対して抑制的に作用するかどうかを検討することが求められるだろう。

評価懸念や対人不安、社交不安障害に関する先行研究で重要性が指摘されている抑制要因の一つが、親の養育態度である。McClure & Pine(2006)によれば、養育態度は子どもの不安の発達の背景にあるメカニズムであると考えられてきた。Wood, McLeod, Sigman, Hwang, & Chu(2003)は、子どもの表出するネガティブな情動を受容するような親の養育態度は、ネガティブな情動に耐える機会や試行錯誤する機会を与えることで子どもの情動調整の力を育み、不安に対する子どもの敏感性を低減すると説明している。また、McLeod, Wood, & Weisz(2007)は、子どもの不安症状に関する研究のメタ分析を通して、心理的自律性を尊重する養育態度が子どもの不安に及ぼす影響の大きさを強調してい

る。心理的自律性の尊重とは、子どもの意見や選択を奨励し、子ども独自の捉え方を認め、子ども自身に問題を解決させる養育態度である(Clark & Ladd, 2000; McLeod, et al., 2007; Whaley, Pinto, & Sigman, 1999)。山本・田上(2003)は、中学時代と現在とで評価懸念の高さに変化がないと回答した大学生について、常に自己評価の基準が他者にあり続けている状態であると考察しており、他律的な状態が評価懸念を維持させる一つの要因であると主張している。伊藤・小玉(2006)も、何らかの外的な優秀さの基準に見合っていたり、対人関係上あるいは心内の期待に応えることで得られる随伴性自尊感情(Deci & Ryan, 1995)が高い場合、自尊感情を確保するために外的基準上での達成行動に縛られることとなり、自己自身による決定(自律性)が難しくなると述べている。山本・田上(2003)と伊藤・小玉(2006)の指摘を踏まえると、心理的自律性を尊重する養育態度は、子どもに自己評価の基準は自分自身にあることを感じさせ、他者からの評価に左右されることのない自己の感覚の発達を促すと推察される。以上のことから、受容的あるいは心理的自律性を尊重する養育態度は対象別評価懸念と負の関連を示すことが予想される。なお、養育態度は子どもの対人認知の基盤を形作るという点から他の対象に対する評価懸念にも影響することが考えられるため、上記の関連は全ての対象別評価懸念との間に見られることが予想される。

また、親以外の他者からの受容経験も抑制要因として有効であることが指摘されている。友人関係においては、仲間からの受容の不足が後の評価懸念を予測すること(Teachman & Allen, 2007)、社会的受容が評価懸念と負の関連を示すこと(La Greca & Stone, 1993)、拒否児や無視児といった低い仲間内地位にいる者の評価懸念が高いこと(La Greca, Dandes, Wick, Shaw, & Stone, 1988; La Greca & Lopez, 1998)が明らかにされている。したがって、友人からの受容経験が「友人に対する評価懸念」と負の関連を示すことが予想される。

なお、学校場面では、友人だけでなく教師との関係も子どもの精神的健康に影響を与えられられる。教師-児童関係においては、教師から自分という存在をそのまま受け入れてもらい尊重されていると感じられる過去の経験が、教師に対する生徒の信頼感に正の影響を及ぼすことが明らかにされている(中井・庄司, 2009)。教師-児童関係における評価懸念に焦点を当てた先行研究がなく、教師からの否定的評価に対する恐れを抑制する具体的な教師の関わりに関する知見は乏しいものの、教師からの受容

経験が教師に対する信頼感を促進するという中井・庄司（2009）の結果を踏まえ、教師からの受容経験が「教師に対する評価懸念」と負の関連を示すことが予想される。

したがって、本研究では対象別評価懸念の抑制要因を明らかにすることを目的とし、養育態度として受容と心理的自律性の尊重を、対人経験として友人および教師からの受容経験を取りあげ、Figure 1に示したモデルを検討する。

## 方 法

### 調査対象者

茨城県内の小学校5、6年生112名（5年生53名、6年生59名；男子58名、女子53名、不明1名）と、同県内の中学校1～3年生238名（1年生169名、2年生33名、3年生36名；男子119名、女子117名、不明2名）、計350名を対象とした。

### 調査時期

2014年5月～9月に実施した。

### 調査内容

- 1) 性別と学年
- 2) 「おうちの人」, 「家の人」の選択

両親のいない調査対象者の回答にかかる負担に配慮し、両親に関する項目では「おうちの人」（中学生には「家の人」と表記）という表現を採用した。「おうちの中であなたに1番影響を与えている人」を「お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、自由記述」の選択肢から1人選択するよう求めた上で、以降の質問で「おうちの人」, 「家の人」という言葉が出てきた際には、選択した人物を想定して答えるよう指示した。

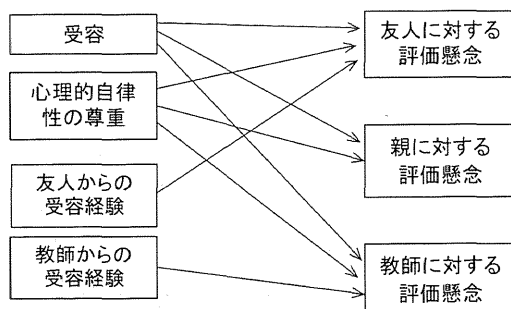


Figure 1. 対象別評価懸念と抑制要因との関連の仮説モデル

### 3) 対象別評価懸念尺度

白倉・濱口（2015）が作成した26項目を用いた。「あてはまる（5点）」～「あてはまらない（1点）」の5件法で回答を求めた。

### 4) 受容的な養育態度を測定する尺度

Schaefer（1965）のCRPBI（Children's Report on Parent Behavior Inventory）の短縮版であるCRPBI-108の日本語版（内海、2012）の下位因子「受容（acceptance）」を使用した。“これまでのあなたに対するおうちの人の態度”について尋ねるために項目の文末表現を過去形に修正した上で用いた。8項目について、「よくあてはまる（4点）」～「全くあてはまらない（1点）」の4件法で回答を求めた。なお、小学生には振り仮名を表記するなど学校段階に適した表記にした上で用いた。

### 5) 心理的自律性の尊重を測定する尺度

遠山（2005）が作成した親の威厳ある養育態度尺度の下位因子「心理的自律性の尊重」を用いた。7項目について、「非常にあてはまる（4点）」～「全くあてはまらない（1点）」の4件法で回答を求めた。なお、本尺度は大学生と専門学校生を対象に、小学校、中学校、高校での親の自分に対する態度を評定させるものであるが、項目表現は小学校高学年と中学生にも理解可能と考え、振り仮名を併記するなど学校段階に適した表記にした上で用いた。

### 6) 友人からの受容経験を測定する尺度

鈴木・小川（2007）が作成した被受容感尺度を用いた。“これまでのあなたの友だちとの関わりの経験”について尋ねるために、相手を「友だち」と明記し、項目の文末表現を過去形に修正した上で用いた。7項目について、「あてはまる（5点）」～「あてはまらない（1点）」の5件法で回答を求めた。なお、本尺度は中学生を対象として開発された尺度であり、小学生には振り仮名を表記するなど学校段階に適した表記にした上で用いた。

### 7) 教師からの受容経験を測定する尺度

中井・庄司（2009）が作成した教師との関わり経験尺度の下位因子「受容経験」と「承認経験」を用いた。計10項目について、「かなりある（4点）」～「まったくない（1点）」の4件法で回答を求めた。なお、本尺度は中学生を対象として開発された尺度であり、小学生には振り仮名を表記するなど学校段階に適した表記にした上で用いた。

### 実施手続き

各学校の学校長に依頼し、承諾を得た学級に対して無記名式の質問紙調査を集団で実施した。なお、本研究は、第2著者が所属する教員組織の研究倫理

委員会の承認を得て実施された。

## 結 果

### 各尺度の信頼性の確認

各尺度の内的-一貫性を確認するため、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、対象別評価懸念尺度全体は.94、「友人に対する評価懸念」は.90、「親に対する評価懸念」は.86、「教師に対する評価懸念」は.88であった。養育態度の「受容」は.91、「心理的自律性の尊重」は.65であった。さらに、対人経験の「友人からの受容経験」は.92、「教師からの受容経験」は.91であった。

養育態度および対人経験を測定する尺度については、中学生や大学生用に開発されたものを小学生にも適用したため、基礎統計量、尖度・歪度、Cronbachの $\alpha$ 係数を学校段階別に検討した（Table 1）。「受容」、「友人からの受容経験」、「教師からの受容経験」については小・中学生で変わらず尺度の内的-一貫性の高さが確認されたが、養育態度の「心理的自律性の尊重」のみ Cronbachの $\alpha$ 係数が小学生は.58、中学生は.68と低い値となった。そこで、小学生と中学生それぞれについて「心理的自律性の尊重」の度数分布の確認を行った。分布の形状に関して尖度と歪度を確認したところ、小・中学生とも

に正規分布の基準となる0から大きく乖離する値ではなかったことから、本研究では「心理的自律性の尊重」を以降の分析でも用いることとした。

### 各下位尺度の基礎統計および尺度間相関

各下位尺度における性別ごとの基礎統計量および平均値の性差に関する $t$ 検定の結果をTable 2に示す。

対象別評価懸念尺度では「友人に対する評価懸念」( $t(323) = 5.70, p < .001$ ) および「教師に対する評価懸念」( $t(313) = 2.79, p < .01$ ) で有意な性差が見られ、女子の方が男子よりも得点が高かった。養育態度では「受容」で有意な性差が見られ( $t(331) = 2.33, p < .05$ )、女子の方が男子よりも得点が高かった。対人経験ではいずれも有意な性差は見られなかった。

続いて、男女別に各尺度間の相関係数を求めた（Table 3）。対象別評価懸念と養育態度との相関については、男子でのみ「親に対する評価懸念」と「心理的自律性の尊重」との間に $r = -.19 (p < .05)$ の有意な負の相関が見られた。対象別評価懸念と対人経験との相関については、女子でのみ「友人に対する評価懸念」と「友人からの受容経験」との間に $r = -.19 (p < .05)$ の有意な負の相関が見られた。

Table 1  
養育態度および対人経験に関する下位因子の基礎統計量、尖度および歪度、 $\alpha$ 係数

|           | 小学生      |           |       |       |          | 中学生      |           |       |       |          |
|-----------|----------|-----------|-------|-------|----------|----------|-----------|-------|-------|----------|
|           | <i>M</i> | <i>SD</i> | 尖度    | 歪度    | $\alpha$ | <i>M</i> | <i>SD</i> | 尖度    | 歪度    | $\alpha$ |
| 受容        | 23.02    | 5.84      | -0.66 | -0.47 | .89      | 21.66    | 6.35      | -0.53 | -0.34 | .92      |
| 心理的自律性の尊重 | 20.86    | 3.24      | -0.08 | -0.05 | .58      | 21.11    | 3.50      | 1.11  | -0.58 | .68      |
| 友人からの受容経験 | 26.08    | 7.05      | 0.07  | -0.84 | .92      | 26.14    | 6.23      | 0.72  | -0.83 | .92      |
| 教師からの受容経験 | 26.97    | 6.52      | -0.52 | 0.11  | .90      | 22.94    | 6.75      | -0.42 | 0.10  | .91      |

Table 2  
各下位尺度における性別ごとの基礎統計量および $t$ 検定結果

|         |            | 男子       |          |           | 女子       |          |           | $t$ 値   |
|---------|------------|----------|----------|-----------|----------|----------|-----------|---------|
|         |            | <i>n</i> | <i>M</i> | <i>SD</i> | <i>n</i> | <i>M</i> | <i>SD</i> |         |
| 対象別評価懸念 | 友人に対する評価懸念 | 163      | 19.52    | (9.08)    | 162      | 25.04    | (8.35)    | 5.70*** |
|         | 親に対する評価懸念  | 168      | 17.79    | (7.90)    | 166      | 18.34    | (7.66)    | 0.64    |
|         | 教師に対する評価懸念 | 153      | 18.41    | (8.07)    | 162      | 20.98    | (8.27)    | 2.79**  |
| 養育態度    | 受容         | 169      | 21.28    | (6.20)    | 164      | 22.86    | (6.13)    | 2.33*   |
|         | 心理的自律性の尊重  | 170      | 20.81    | (3.48)    | 162      | 21.22    | (3.31)    | 1.10    |
| 対人経験    | 友人からの受容経験  | 168      | 25.51    | (6.62)    | 166      | 26.66    | (6.31)    | 1.63    |
|         | 教師からの受容経験  | 166      | 24.45    | (7.06)    | 164      | 23.79    | (6.73)    | -0.9    |

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

## 対象別評価懸念の抑制要因に関するモデルの検討

Figure 1に示した仮説モデルを想定し、男女別に共分散構造分析を行った。男子におけるモデルの適合度は、 $\chi^2(4)=5.55$ ,  $p=.24$ , GFI=.99, AGFI=.92, CFI=1.00, RMSEA=.06であった。女子におけるモデルの適合度指数は、 $\chi^2(4)=5.95$ ,  $p=.20$ , GFI=.99, AGFI=.92, CFI=.99, RMSEA=.06であった。

まず、男女間で等値制約のないモデル1について多母集団同時分析を行った。その結果、「友人からの受容経験」と「友人に対する評価懸念」との間のパスで性差が有意となったが、男子は.11、女子は-.08であり、5%~0.1%水準ではいずれのパス係数も有意とはならなかった。続いて、性差が見られたこのパラメータに等値制約を置いたモデル2について多母集団同時分析を行い、モデル1との比較を行った（Table 4）。その結果、全ての適合度指標においてモデル1の方が良好な値であったため、等値制約を置かないモデル1が採用された。ただし、モデル間で適合度指標の値に大きな差異は見られなかったことから、性差は局所的なものに留まり、男女とも同じモデルが適用可能であると判断した。最終的なモデルをFigure 2に示す。

パス係数が有意となったのは、養育態度の「心理的自律性の尊重」と「親に対する評価懸念」との間のパスのみであった。男子は-.28 ( $p<.01$ )、女子

は-.21 ( $p<.05$ )の有意な負のパス係数が認められた。

## 考 察

本研究では、対象別評価懸念の抑制要因として養育態度と対人経験を取りあげ、これらの要因と対象別評価懸念との関連の様相を明らかにするために性別による多母集団同時分析を行った。その結果、男女とも子どもの心理的自律性を尊重する親の養育態度が「親に対する評価懸念」を抑制する方向で作用することが明らかとなった。

思春期早期への移行期は、子ども自身の主体性の要求と両親からの自立という社会的要請がぶつかる発達の局面であり、この時期に親の侵入性を低めて自律性の尊重を高めることが、子どもの不安の問題に対して効果的であるという（McLeod, Wood, & Anvy, 2011）。また、Wood et al. (2003) は、年齢相応の自立や主体性が親に妨げられることで子どもは無力感や不安を感じるようになり、親の手助けによって不安が一時的に低減される経験を重ねることで親からの分離に関する不安が発展する可能性を指摘している。本研究では、心理的自律性の尊重と有意な負の関連が見られたのは「親に対する評価懸念」のみであった。児童期後期から思春期における親による子どもの心理的自律性の尊重の有無は、年齢不相応な親子間の依存関係の問題を孕んでいるた

Table 3  
各尺度間の相関係数

|  | 1      | 2      | 3      | 4      | 5      | 6      | 7      |
|--|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 1. 友人に対する評価懸念 (男子 $n=163$ , 女子 $n=162$ ) | -      | .68*** | .79*** | -.01   | -.07   | .02    | .11    |
| 2. 親に対する評価懸念 (男子 $n=168$ , 女子 $n=166$ )  | .54*** | -      | .76*** | .02    | -.19*  | .02    | -.01   |
| 3. 教師に対する評価懸念 (男子 $n=153$ , 女子 $n=162$ ) | .66*** | .75*** | -      | .03    | -.09   | -.06   | .06    |
| 4. 受容 (男子 $n=169$ , 女子 $n=164$ )         | -.03   | -.01   | .11    | -      | .44*** | .29*** | .37*** |
| 5. 心理的自律性の尊重 (男子 $n=170$ , 女子 $n=162$ )  | -.12   | -.15   | -.05   | .58*** | -      | .28*** | .20*** |
| 6. 友人からの受容経験 (男子 $n=168$ , 女子 $n=166$ )  | -.19*  | -.12   | -.05   | .49*** | .37*** | -      | .32*** |
| 7. 教師からの受容経験 (男子 $n=166$ , 女子 $n=164$ )  | -.16   | .04    | .05    | .44*** | .22**  | .30*** | -      |

\*\*\*  $p<.001$ , \*\*  $p<.01$ , \*  $p<.05$

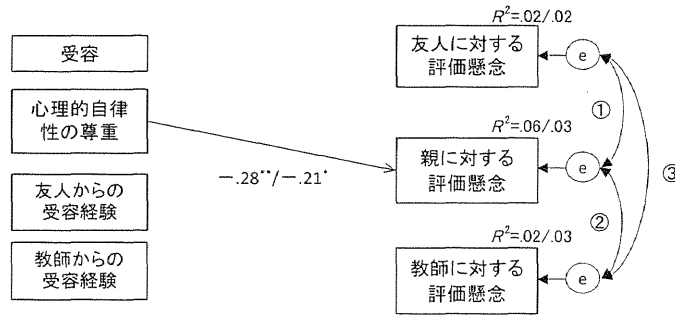
右上に男子の相関係数、左下に女子の相関係数を示す

先頭行に記した1から7の番号は、先頭列に記載した尺度名に付した番号と対応している

1から3は対象別評価懸念、4と5は養育態度、6と7は対人経験に関する尺度である

Table 4  
多母集団同時分析における各モデルの適合度

|             | $\chi^2$ | df | $p$   | GFI   | AGFI  | CFI   | RMSEA | AIC     |
|-------------|----------|----|-------|-------|-------|-------|-------|---------|
| モデル1 (制約なし) | 11.495   | 8  | 0.175 | 0.988 | 0.916 | 0.994 | 0.041 | 107.495 |
| モデル2 (制約あり) | 15.767   | 9  | 0.072 | 0.984 | 0.898 | 0.989 | 0.053 | 109.767 |



図中の数値は、男子/女子の順に記載した(男子  $n=128$ 、女子  $n=139$ )  
 有意なパスのみ表示し、誤差と共分散は一部省略して示した  
 \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

| 説明変数間の相関  |         | 基準変数間の相関 |         |
|-----------|---------|----------|---------|
| 友人経験・教師経験 | .29/.30 | 教師経験・受容  | .41/.44 |
| 友人経験・受容   | .25/.47 | 教師経験・自律性 | .26/.24 |
| 友人経験・自律性  | .31/.36 | 受容・自律性   | .48/.58 |
|           |         | ①        | .67/.53 |
|           |         | ②        | .74/.76 |
|           |         | ③        | .79/.65 |

Figure 2. 対象別評価懸念と抑制要因との関連 (多母集団同時分析)

め、友人や教師といった社会的な対人関係における評価懸念とは関連を示さなかったと推察される。

なお、対象別評価懸念と友人や教師からの受容経験との関連については、相関分析において有意な相関は見られず、多母集団同時分析においても有意なパスは認められなかった。つまり、本研究では、友人や教師から受容される経験は対象別評価懸念の低減と関連があるという結果は示されなかった。欧米の先行研究では、評価懸念と社会的受容との間の負の関係性が示されてきたが (La Greca & Stone, 1993; Teachman & Allen, 2007)、なぜ本研究では同様の傾向が見いだされなかったのだろうか。他者からどう思われているかを気にする傾向が強い子どもの場合、これまで孤立あるいは拒絶されることなく、ある程度の社会的受容を経験していたとしても、いつ自分が仲間外れにされるかも分からないという恐れを常に抱いている可能性が考えられる。本邦では、上記の傾向が欧米と比して強いのではないだろうか。ある文化において暗黙の内に共有されている人々の思考、感情、社会的行動に関する通念とされる文化的自己観においては、独立し他者から切り離れた自己を重視する相互独立的自己観は西洋文化に、他者と相互に協調・依存した自己を重視する相互協調的自己観は日本を含む東洋文化に特有であると考えられている (北山・唐澤, 1995)。また、他者へ同調することで個の成長が途絶えることが西洋における文化的悪夢であるのに対して、日本人における文化的悪夢は他者から切り離されることであると言われている (Plath, 1980 井上・杉野目訳 1985)。上記のような文化的背景の違いを考慮する

と、本邦では受容経験の有無にかかわらず常に排除される恐れを抱きやすいため、他者から受容されたという対人経験は、対象別評価懸念を低減する程の効果を持たなかったと推察される。なお、渡部・新井・濱口 (2012) は、中学生における親の期待について、期待を感じている程度に関わらず、最終的に子どもがどのように期待を受け止めているのかということが適応において最も重要であると主張している。子どもが親の期待を積極的に受け止める場合には自己価値が促進されるのに対し、親の期待に対して負担感を抱いたり、親の失望を回避しようとする場合には、子どもの自己価値を低め、抑うつ・不安感を高めるなど不適応を促進するという (渡部他, 2012)。山本・田上 (2003) は大学生の自伝的記憶を用いた半構造化面接において、評価懸念を低減する経験として承認される経験や理解される経験が重要であることを示した一方で、一見類似した出来事が承認される経験として個人の中に位置づいている場合もあれば、逆に懸念を高めるきっかけとなっている場合もあることを指摘している。したがって、他者から受容された経験の程度よりも、その受容経験を本人がどのように受け止めているかということを取りあげることで、対象別評価懸念の低減に作用する受容経験をより詳細に明らかにすることができるかもしれない。

また、親の受容的な養育態度も、対象別評価懸念との間に有意な負の関連が認められなかった。この点に関しては、養育態度の組み合わせの問題が影響している可能性がある。例えば、Workman (2009) は、養育態度における温かさの低さと統制の高さの

組み合わせである養護なき統制 (affectionless control, Parker, 1984) が子どもの不安を高めるとしている。また, McLeod et al. (2007) では, 拒絶の下位次元の養育態度である「温かさの低さ」の標準化された効果量が .06 と他の養育態度の下位次元と比べて小さいことが明らかにされている。つまり, 受容的な養育態度が単体で子どもの対象別評価懸念に及ぼす影響は小さく, そのため本研究では有意な負の関連が見られなかったと考えられる。

最後に, 本研究で得られた知見と今後の課題について述べる。子どもの心理的自律性を尊重する養育態度が対象別評価懸念の低減に有効であることが示されたことは, 対象別評価懸念の予防的介入に関する知見の蓄積の一助となるものである。児童期には, 友人関係とともに親にも依存している状態であるが (國枝・古橋, 2006), 青年期前期には, 児童期の理想化された親イメージが崩壊するとともに現実の親を批判し, 親への心理的依存性からの離脱が進む (岡本・上地, 1999)。したがって, この時期に親が子ども自身の力で解決可能な課題に口出しや手出しをせず, 子どもの決断を尊重する姿勢を取ることが対象別評価懸念の病理化を防ぐ対策の一つとなり得ると思われる。

しかし, あくまでその効果が見られるのは「親に対する評価懸念」のみであった。さらに, 友人関係や教師-児童関係に関して, 対象別評価懸念の抑制に有効な要因を特定することはできなかった。今回取りあげた抑制要因の対象別評価懸念に対する説明率は 2%~6% と値が小さかったことから, 今後は本研究では扱うことができなかったその他の要因の検討や, 被受容経験の「程度」ではなく「質」に着目した検討などが求められると言えるだろう。特に, 子どもの不安障害は単一の原因によって生じるのではなく, 学校などの社会的文脈も考慮する必要があること (Appleton, 2008), 社会的な相互作用や評価場面でのネガティブな経験が不安に関連する問題の契機となること (Kearney, 2005; Morris, 2001) を踏まえ, 親の養育態度のみを問題とするのではなく, 友人や教師などより幅広い周囲の人々の関わりにも焦点を当てて, 対象別評価懸念に対する効果的な介入のあり方を考えていくことが望ましいと思われる。

## 引用文献

Appleton, P. (2008). A developmental framework for understanding children's anxiety. In P. Appleton (Ed.), *Children's anxiety: A contextual approach*

(pp.3-39). East Sussex: Routledge.

Clark, K. E., & Ladd, G. W. (2000). Connectedness and autonomy support in parent-child relationships: Links to children's socioemotional orientation and peer relationships. *Developmental Psychology, 36*, 485-498.

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1995). Human autonomy: The basis for true self-esteem. In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem* (pp.31-49). New York: Plenum.

伊藤正哉・小玉正博 (2006). 大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討— 自尊感情ならびにその随伴性に注目して— 教育心理学研究, *54*, 222-232.

Kearney, C. A. (2005). The etiology of social anxiety and social phobia in youths. In C.A. Kearney (Ed.), *Social anxiety and social phobia in youth: Characteristics, assessment, and psychological treatment* (pp.49-70). New York: Springer.

Kessler, R. C., Berglund, P., Demler, O., Jin, R., Merikangas, K.R., & Walters, E.E. (2005). Lifetime prevalence and age-of-onset distributions of DSM-IV disorders in the National Comorbidity Survey Replication. *Archives of General Psychiatry, 62*, 593-602.

北山 忍・唐澤真弓 (1995). 自己：文化心理学的視座 実験社会心理学研究, *35*, 133-163.

國枝幹子・古橋啓介 (2006). 児童期における友人関係の発達 福岡県立大学人間社会学部紀要, *15*, 105-118.

La Greca, A. M., Dandes, S. K., Wick, P., Shaw, K., & Stone W.L. (1988). Development of the social anxiety scale for children: Reliability and concurrent validity. *Journal of Clinical Child Psychology, 17*, 84-91.

La Greca, A. M., & Lopez, N. (1998). Social Anxiety among adolescents: Linkages with peer relations and friendships. *Journal of Abnormal Child Psychology, 26*, 83-94.

La Greca, A. M., & Stone, L. W. (1993). Social Anxiety Scale for Children-Revised: Factor structure and concurrent Validity. *Journal of Clinical Child Psychology, 22*, 17-27.

McClure, E. B., & Pine, D. S. (2006). Social anxiety and emotion regulation: A model for developmental psychology perspectives on anxiety disorder. In D. Cicchetti, & D.J. Cohen (Eds.), *Developmental Psychopathology. Vol.3.*

- Risk, Disorder, and Adaptation* (pp.470-502). New York: John Wiley & Sons.
- McLeod, B. D., Wood, J. J., & Anvy, S. B. (2011). Parenting and child anxiety disorders. In D. McKay, & E.A. Storch (Eds.), *Handbook of child and adolescent anxiety disorders* (pp.213-228). New York: Springer.
- McLeod, B. D., Wood, J. J., & Weisz, J.R. (2007). Examining the association between parenting and childhood anxiety: A meta-analysis. *Clinical Psychology Review, 27*, 155-172.
- Morris, T. L. (2001). Social phobia. In M.W. Vasey, & M.R. Dadds (Eds.), *The developmental psychopathology of anxiety* (pp.435-458). New York: Oxford University Press.
- 中井大介・庄司一子 (2009). 中学生の教師に対する信頼感と過去の教師との関わり経験との関連教育心理学研究, 57, 49-61.
- 岡本清孝・上地安昭 (1999). 第二の固体化の過程からみた親子関係および友人関係 教育心理学研究, 47, 248-258.
- Ollendick, T. H., King, N. J., & Frary, R. B. (1989). Fears in children and adolescents: Reliability and generalizability across gender, age, and nationality. *Behaviour Research and Therapy, 27*, 19-26.
- Parker, G. (1984). The measurement of pathogenic parental style and its relevance to psychiatric disorder. *Social Psychiatry, 19*, 75-81.
- Plath, D. W. (1980). *Long engagement: Maturity in modern Japan*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- (プラーズ, D.W. 井上 俊・杉野目康子 (訳) (1985). 日本人の生き方—現代における成熟のドラマ 岩波書店)
- 笹川智子・高橋 史・佐藤 寛・赤松亜紀・嶋田洋徳・野村 忍 (2009). 日本の児童生徒における社会不安の特徴—Social Phobia and Anxiety Inventory for Children (SPAI-C) を用いた検討 心身医学, 49, 909-921.
- Schaefer, E. S. (1965). Children's reports of parental behavior: An inventory. *Child Development, 36*, 413-424.
- Schneier, F. R., Johnson, J., Hornig, C. D., Liebowitz, M. R., & Weissman, M. M. (1992). Social phobia: Comorbidity and morbidity in an epidemiologic sample. *Archives of General Psychiatry, 49*, 282-288.
- 鈴木真吾・小川俊樹 (2007). 自尊心と被受容感による思春期の適応理解の検討—社会的スキルとの関連から— 筑波大学心理学研究, 34, 91-99.
- Teachman, B. A., & Allen, J. P. (2007). Development of social anxiety: Social interaction predictors of implicit and explicit fear of negative evaluation. *Journal of Abnormal Child Psychology, 35*, 63-78.
- 遠山孝司 (2005). 回想的な方法による親と教師の威厳ある養育・指導態度尺度の作成 東海心理学研究, 1, 21-29.
- 内海緒香 (2012). 青年期の養育における親子認知の相違—一級内相関と確証的因子分析— Proceedings 格差センシティブな人間発達科学の創成, 20, 103-112.
- 臼倉 瞳・濱口佳和 (2015). 小学校高学年および中学生における対象別評価懸念と適応との関連教育心理学研究, 63, 85-101.
- 渡部雪子・新井邦二郎・濱口佳和 (2012). 中学生における親の期待の受け止め方と適応との関連教育心理学研究, 60, 15-27.
- Watson, D., & Friend, R. (1969). Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology, 33*, 448-457.
- Westenberg, P. M., Drewes, M. J., Goedhart, A. W., Siebelink, B. M., & Treffers, P. D. A. (2004). A developmental analysis of self-reported fears in late childhood through mid-adolescence: Social-evaluative fears on the rise? *Journal of Child Psychology and Psychiatry, 45*, 481-495.
- Whaley, S. E., Pinto, A., & Sigman, M. (1999). Characterizing interactions between anxious mothers and their children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology, 67*, 826-836.
- Wood, J. J., McLeod, B. D., Sigman, M., Hwang, W., & Chu, B. C. (2003). Parenting and childhood anxiety: Theory, empirical findings, and future directions. *Journal of Child Psychology and Psychiatry, 44*, 134-151.
- Workman, J. O. (2009). *A cognitive-mediated model of child social anxiety and depression: Examining children's relationships with parents and teachers* (Unpublished doctoral dissertation). The University of North Carolina, Greensboro.
- 山本淳子・田上不二夫 (2003). 思春期における対人経験と評価懸念との関連—自伝的記憶による探索的検討 教育相談研究, 41, 21-38.

(受稿9月30日: 受理10月26日)